

セミ・ダイナミック補正は、“セミ・ダイナミック補正とは、プレート運動に伴う定常的な地殻変動による基準点間の歪みの影響を基準点測量で得られた測量結果に補正し、測地成果2011の元期における測量成果を求めるための補正である。”と定義されている。図6.5で分かるように、観測地域の地殻変動量が不均等の場合、セミ・ダイナミック補正が大きくなる。観測地域の地殻変動量が等量の場合、セミ・ダイナミック補正は、零である。

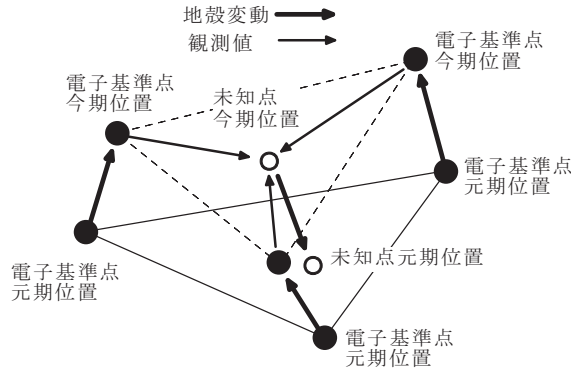


図 6.5 セミ・ダイナミック補正の概念図

約 1,300 点配置された電子基準点の点間間隔は、約 20km である。これらの電子基準点の元期から今期までの地殻変動から、約 5km×5km 格子点の地殻変動をクリギング法により計算し、この格子点の地殻変動量が地殻変動補正パラメータとして提供されている。

地殻変動補正パラメータは、図 6.6 に示すように、電子基準点の過去のデータから推測した F3 解の値が、その年の年度の今期座標として 1 年間使われる。今期座標から元期座標を減じた値が、地殻変動補正パラメータとして、毎年度初めの 4 月 1 日に国土地理院が公開する。

年度後半の 3 月 31 日の地殻変動補正パラメータは、15 ヶ月前の地殻変動量である。図 6.2 に示す 2011 年東北地方太平洋沖地震の余効変動域は、定常的地殻変動よりかなり大きく、現行のセミ・ダイナミック補正に使う地殻変動補正パラメータでは対処が難しい。

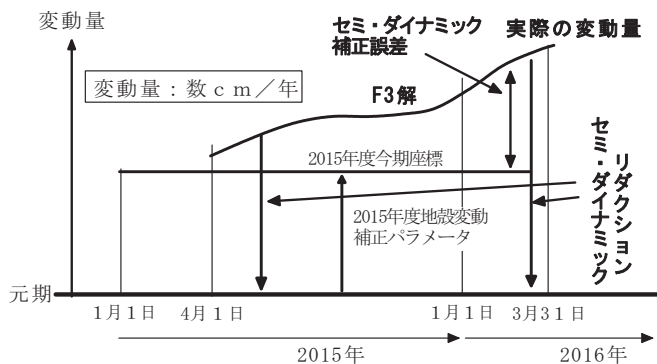


図 6.6 地殻変動補正パラメータと F3 解の関係